

## 要 約

### 日本海周域における植物分類地理学的研究 (1980)

里見信生 (金沢大学理学部生物学教室)

Phytogeographical Studies Around the Japan Sea (1980)

Nobuo SATOMI (Laboratory of Systematic Botany and Phytogeography of the Faculty of Science, Kanazawa University.)

○ 和久田昌則・芦原孝治・里見信生：石川県の社叢林について (七) 輪島市・珠洲市の社叢林について, 石川県高等学校生物部会々誌 No. 16, 3~32 (1980)

筆者らは石川県の過去の植生(原植生)を推察し, 更に今後の地域開発, 自然保護などの手がかりにと, 昭和47年より社叢林の調査を行なっているが, 第7報では輪島市と珠洲市の二市を取り上げた。1~6報と同様, 調査した177社をa, b, c, dの4段階に区分したが, aは森林の各階層の発達がよく, かなりの面積をもつもの; bは森林の階層がやゝおとり, 面積もやゝ小さいもの, cは階層構造がみられず草本層を欠いているもの; dは森林が全く見られないものである。この中で保存の必要があるものは, 申すまでもなく a, b段階のもので, それらは次の24社である。

輪島市: 1. 白山神社(名舟町), 2. 石倉比古神社(町野町西時国), 3. 南志見住吉神社(里町), 4. 八幡神社(横地町), 5. 高洲神社(大野町), 6. 石動社(町野町徳成谷内), 7. 櫛原北代比古神社(深見町鷲嶽), 8. 日吉神社(惣領町岡塚), 9. 輪島前神社(輪島崎町), 10. 諏訪八幡神社(杉平町) 計10社

珠洲市: 1. 須々神社(三崎町寺家), 2. 片姫神社(三崎町森腰粟津), 3. 大屋田神社(三崎町大屋), 4. 須々神社奥宮(狼煙町山伏山), 5. 丹生神社(狼煙町), 6. 徳保神社(木の浦), 7. 八幡神社(笹波町), 8. 片岩白山神社(片岩町), 9. 日吉神社(高屋町), 10. 稻荷神社(宝立町鶴島), 11. 高倉彦神社(蛸島町), 12. 大谷神社(大谷町), 13. 春日神社(馬縹町), 14. 北嶋荒御前神社(長橋町) 計14社

これを自然林段階よりみると, aの社叢林は1, bの社叢林は23社である。

また, 林相よりみると,

タブ林 (タブーイノデ群集)

輪島市 (3, 7, 8, 9—4社), 珠洲市 (2, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13,—9社)

スダジイ林 (スダジイーヤブコウジ群集)

輪島市 (2—1社), 珠洲市 (1, 4, 7—3社)

ウラジロガシ林 (ウラジロガシーヒメアオキ群集)

輪島市 (10-1 社)

ケヤキ林

輪島市 (1, 5-2 社), 珠洲市 (14-1 社)

シデ林

輪島市 (4, 5, 6-3 社), 珠洲市 (3-1 社)

アカガシ林

珠洲市 (4-1 社)

○ 里見信生・小牧旌・寺下友三郎：(能登外浦地域の) 植生，能登外浦地域自然環境調査報告書，1～42，石川県環境部 (1980)

能登半島の外浦地域の自然環境診断を行うために，現存植生図と潜在植生図を用意したが，潜在植生図で見られるような，この地域の自然植生は，現存植生図であらわされるような形に変えられてしまった。

この中で，わずかに残されている自然植生，または自然植生に近い群落は貴重なものであって，単に学術上重要であるというだけでなく，環境保全のためにも，環境保全林または環境保全緑地として厳正に保護維持しなければならぬことは言うまでもない。

そこで，上述のような場所を，現存植生図の中から捨い上げて行くと，次のような場所が重要なものである。

#### A. ブナクラス域自然植生

能登半島のブナ林は，かつて標高 300m あたりまで下降していたことが推察できる。そこで，潜在植生図は標高 300m 以上の地を，ブナーチシマザサ群集としてあらわしたが，本調査地内のそれらは，宝立山・高洲山・鉢伏山及び桑塚山を中心とする地域にまとまった面積があるほか，小面積の地域が散在する。しかし，現在では宝立山・高洲山・鉢伏山等の山頂部に小面積が残されているにすぎない。したがって，これらの林分は貴重なもので，厳正に保護することが必要である。

なお，この林域に入る輪島市下黒川に，ミズバショウ群落がある。この場所は三蛇山の南 1km の緩傾斜面で，標高は 300m である。林道小池線・佐比野線が群生地を通る計画であったが，その後の調整で変更され，群生地の破壊はまぬかれた。しかし，林道開通後には，多数の人がおとづれると思われるので，その保護対策が必要である。

#### B. ヤブツバキクラス域自然植生

ヤブツバキクラス域自然植生は，かろうじて社叢林と海岸植物群落でみられるだけである。社叢林は，古来，信仰のもとに，地域社会の精神的連帯のシンボルとして長く保存されて来たものであるから，わが国の自然保護において，社叢林を維持することは重要な課題である。

外浦で保護すべき社叢林は狼煙町，須々神社奥宮；狼煙町，丹生神社；高屋町，日吉神社；高屋町，徳保神社；笹波町，八幡神社；馬縹町，春日神社；大谷町，大谷神社；長橋町，北島荒御前神社；片岩町，片岩白山神社(以上珠洲市)；町野町，石動社；里町，南志見住吉神社；深見町，檮原北代比古神社；惣領町，日吉神社；大野町，高洲神社；杉平町，諏訪八幡神社；横地町，八幡神社；崎町，輪島前神社(以上輪島市)；吉浦，白山神社；深見，滝神社；鹿磯菅原神社；道下，諸岡比古

神社；剣地、剣地八幡神社；池田、大蔵神社；大泊、八幡神社（以上門前町）である。

なお、寺有林では曾々木の岩倉寺の裏山のタブとスダジイが繁っている常緑林は標高が180mで、タブ・スダジイが能登外浦としては高い所まで上っていて興味ある存在である。

次に海岸植生としては、猿山のシナノキ・エゾイタヤ林、大川砂丘植物群落、シヤク崎岩礁海岸植物群落、舳倉島の植物群落、七ツ島（特に大島）の植物群落は保護すべきものであろう。

最後に、この報告では、本調査地域内の稀少種の目録を付記した。

○ SATOMI, N.: On the *Mallotus japonicus* Forest Observed in Two Islands in Nanao Bay, Ishikawa Pref., Japan. Bull. Yokohama Phytosoc. Soc. Japan 16: 245—249 (1980)

TUXEN 博士の80歳を祝う記念論文集に投稿したものである。彼は昭和39年10月8日、SCHMITHÜSEN を伴ない、金沢を訪ねられた。私は立山に案内し、既に新雪が積る弥陀ヶ原で、雪をかきわけ高山植生を調査された彼の姿に感銘を覚えた。

この論文では、七尾湾に浮ぶ、水越島・大島に見られるアカメガシワ林について、その性格と予想される遷移について論じたが、主旨はこの報告の第10号の要約に記しておいたので、重複をさげ省略する。

○ 里見信生：雄島と雌島の植物，雄島・雌島（七尾南湾）自然環境調査報告書，1～3，石川県環境部（1980）

雄島・雌島は、七尾南湾に浮ぶ小島で、その面積およそ雄島が500㎡、雌島が2500㎡ばかりである。しかも、標高は雄島が2mぐらいで、雌島も3.5mと低い。したがって、陸上に産する高等植物の種類数は極めて少ない。

この調査で確認したものは、雄島で10種、雌島で42種類である。これに、今回見ることができなかった既知の種類（小牧旌：七尾市史）、雄島5種、雌島25種を加えると、雄島に15種、雌島に67種が生育することになる。

その植生は、雄島に土壌の堆積がほとんどなく、樹木は生育出来ず、岩の凹みや間隙にタイトゴメを優占種とする群落のみみられるだけである。これに比し、雌島は周辺にタイトゴメを優占種とする群落があり、最高点を含め中央部には、メダケを優占種とする群落が生じている。斯様に両島は種類が少なく、その植生も単純であるが、七尾湾内の景観保全のためにその保護が必要と思われる。

○ 里見信生・山田孝：山是清団地の植物目録，環境変化追跡調査報告書1～14（1980）

本調査は、北陸農政局による、石川県鳳至郡門前町山是清団地の農用地開発工事が、将来、その地域の植生にどのような変化をもたらすかという目的で計画され、実施中の調査の一部であって、吾々に課せられた内容は、植物相（フローラ）の立場からの追跡にある。

調査は昭和55年4月より10月まで、毎月定期的に開発予定地域とその周辺に生育する植物の採集を行ない、標本を作製し、その種の同定を行なった。

5ヶ年継続事業であるので、この間に絶滅する種類が記録されるであろうし、また、当然考えられる帰化植物のあるものが、加わって来ることが予想される。

○ 里見信生：植物群落の重要度評価——特に北陸地方の自然林について、自然保護上留意すべき植物群落の評価に関する研究（環境庁），41～47（1980）

植物群落の重要度評価について提案された沼田試案により、北陸におけるスタジイ林 36 ケ所について算出してみると、北陸のスタジイ林の評価値は 39～44 となった。

最高点に評価された須々神社金分宮のスタジイ林と気多神社のスタジイ林は、両者ともに国指定の天然記念物であって、この点からみても沼田試案は、植物群落の重要度評価にあたって、それほど不都合ではない。環境庁において討論された問題点を修正すれば使用できるものと思われる。

そこで、同種の自然林の評価で差が生じるのは遷移度・植生高・1 団地の面積・群落の持続性・立地の角度・構成種の稀少性であって、逆に言えば、北陸のスタジイ林としての共通の評価点 19 (種の組合せ：4, 分布の稀少性と限界性：2, 階層数：5, 自然度：5, 群落の上着性：3 の合計) に上記の遷移度・植生高・1 団地の面積・群落の持続性・立地の角度・構成種の稀少性の評価点を加えればよいのではなかろうか。

こういったやり方で、北陸のタブ林 18 ケ所について重要度の評価を算出した。

この結果をみても、雄島のタブ林と鹿島明神社のタブ林が、ともに高い評価値を得た。これはスタジイ林の場合と同様妥当性がある。

以上、スタジイ林とタブ林について重要度評価を行なったが、評価の高い自然林については、国レベルにおいて天然記念物指定が行なわれ、一応保護の方策がとられている。しかし、それ以上の北陸 3 県内で特定植物群落として取り上げられた多くのヤブツバキクラス域の自然林 (アカガシ林・ツクバネガシ林・ウラジロガシ林もふくめて) は、ヤブツバキクラス域が古来人の居住する地域として各種の開発行為があったにもかかわらず、信仰心に守られて伐採をまぬがれて来た極めて重要な自然林であって、仮に評価点に差があっても貴重な自然林であることに相違なく、県又は市町村レベルで保護して行かねばならぬ。

次にブナクラス域の自然林として、北陸のブナ林 33 ケ所の重要度評価を行なった。この結果をみると、ブナ林で高い評価を得る条件には 1 団地の面積が広いことが必要のようにみえる (赤兎山 150ha, 纏ヶ岳 25ha, 冠山 33.6ha, 鷲鞍岳 40ha, 犀川源流 300ha, 丸石谷 130ha, 鈴ヶ岳 100ha, チブリ尾根 200ha, イブリ山 100ha)。中でも白山国立公園内では、丸石谷およびチブリ尾根の他に千丈平、目附谷等にブナの美林が多く、それらを合計すると 500ha をこえる。これは、日本の国立公園でも有数のもので、白山国立公園のブナの伐採は安易に行なわれないことを望みたい。

○ 里見信生・寺下友三郎・池田良幸：(能都町の) 植物，能都町史 (第 1 巻，資料編)，131～258 (1980)

(能都町の) 植物の内容は、第 1 節植生 (里見信生)、第 2 節能都町の高等植物 (里見信生・寺下友三郎)、第 3 節能都町の下等植物 (蘚苔類：寺下友三郎、キノコ類：池田良幸、海藻類：寺下友三郎) の 3 節からなる。

第 1 節では、能都町の前植生と現存植生を述べ、前植生より現存植生への変遷を記述した。

第 2 節では、能都町の植物相がどのような種類から成り立っているか、また、それが近隣の地域とどのような関係にあるかを記述した。すなわち、最初に能都町で確認された高等植物の種類目録をあげ、それらを寒地性の植物、暖地性の植物、日本海要素の植物、帰化植物といった項目のもとに解析を行なった。この結果、能都町は能登半島の内浦側に面していて、比較的気候が温暖であ

ることと、標高が低くブナクラス域を含まないために、隣接地にくらべると寒地性の種類が少なく、暖地性の種類が多い。次に分布様式が日本海側にかたよっている日本海要素と言われるものは、日本海の成立によって生じた日本海側にかたよって分布するものを言うが、勿論、能都町も日本海側に位置するので、日本海要素の種類を多数含んでいる。

帰化植物では、近年、各種の開発が進むに従って、その数が増加しているが、能都町の帰化植物率は0.07でこれを人口密度の高い地域にくらべるとはるかに低率で自然度の高いことを示しているが隣村の柳田村の0.04にくらべると、能都町の方が船の出入がある他、陸路の交通量も多いので人為的に乱されている。

なお、最後に自然保護の立場から、能都町の保護すべき植物群落と稀少種について、また付録として巨樹・老樹の目録を記した。

第3節では、1. 蘚苔類、2. キノコ類、3. 海藻類の概説と所産種類の目録である。